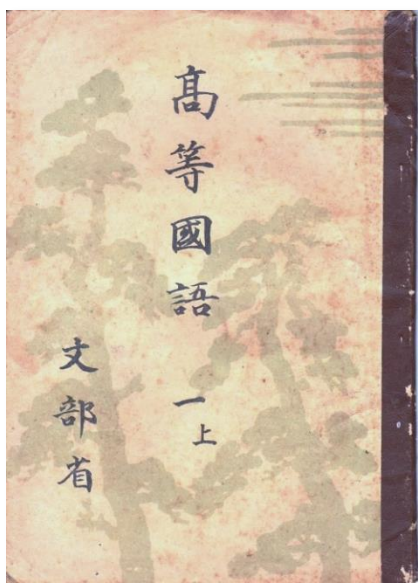
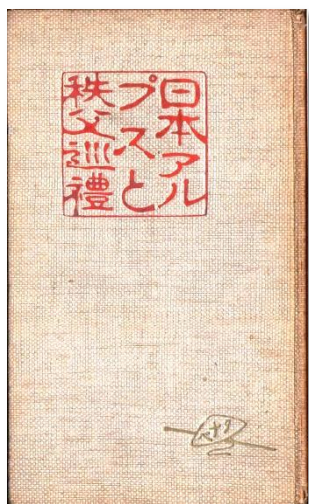




鹿沼の自然・栃木の旅

月報第49号

(2017年8月)



田部重治『日本アルプスと秩父巡禮』と文部省教科書「高等國語 一上」

汽車で甲府平を通る時、笛吹川の荒涼たる流れの姿を見て、誰れか想ひを甲信の境にはせて、渾然として潤ひに充てる其源流の面影や、人為の跡の入込んだことのない完全や、自然それ自身の純一なる調整を想像しうるものがあるだらうか。
(詳細は4頁より)

北光クラブ
自然観察クラブ 鹿沼



☺ 本号の内容 ☺

活動案内	横根山ハイキング～花崗岩と湿原の山～	3
表紙の本	文部省『高等國語』	4
	田部重治研究会「鶴のやうに」第15号より「鶴聖の河」	6
愛書家のひとり言	アンソロジーとしての教科書	11
活動報告・1	宇都宮・長岡の森ハイキング	13
活動報告・2	足利・行道山ハイキング～傑僧行基の足跡を辿って～	16
野州文献好古・1	前沢輝政著『足利の歴史』より「傑僧行基の足跡」	18
活動報告・3	石裂山・千本かつらハイキング～加蘇山神社に拝して千本かつらへ～	21
野州文献好古・2	「加蘇山神社由緒沿革」	23
活動報告・番外編1	奥多摩・惣岳山ハイキング	24
活動報告・4	初夏の夕日岳ハイキング～鹿沼の最高地点（1526m）を目指して～	25
活動報告・番外編2	鹿沼三十三観音巡礼	27
活動報告・番外編3	会津田代山ハイキング	27
野州文献好古・3	三田幸夫「越後銀山平より会津の山旅」より「田代山」	28
里山紳士交遊録		31
山書談話室		35
生きている言葉	三木清著『人生論ノート』より「個性について」	36
おしらせ	自然観察クラブ2017年度活動予定（今後）	37
好日往来		38
会長妄言		39

懇親会のお知らせ

下記のとおり懇親会を実施いたします。皆様万障お繰り合わせの上、ご参加くださいますよう、ご案内申し上げます。（詳細は38頁もご参照ください）

日 時：8月26日（土）PM7:00より

会 場：寧々家（西茂呂、ヨークベニマル鹿沼店南側）

会 費：4,000円

参加できる方は8月24日（木）までに阿部までお電話ください。

鹿沼学舎主催「横根山自然観察会」に合流
横根山ハイキング
～花崗岩と湿原の山～

紅葉にはまだまだ早い季節ですが、9月上旬の横根山は、すでに秋の花の季節。夏の花の咲き残りとおと秋の花とで種類は結構多い。一つ一つ、花の種類を確認しながら、見たことのない植物に出会うかも知れない、ときめきのハイキングです。

今回はまず横根山山頂まで登って（標高差50m）展望を楽しみ、井戸湿原に下って湿原植物を観察し、五段ノ滝まで下って花崗岩の岩塊斜面を下瞰し、井戸湿原に戻って、象ノ鼻に出てお昼。牧場の中の車道を歩いてハイランドロッジに戻ります。

日 時：9月10日（日）AM8:00 鹿沼市役所駐車場

または AM9:00 横根山ハイランドロッジ集合（雨天中止）

行 程：鹿沼市役所——古峯神社——古峰ヶ原湿原——深山巴の宿
——横根山ハイランドロッジ^①^②……横根山山頂（1372.8m）
……井戸湿原……五段ノ滝……井戸湿原……象ノ鼻^③……（車道）
……横根山ハイランドロッジ——鹿沼市役所

服 装：長袖、長ズボン、帽子、手袋（軍手など）、
軽登山靴または運動靴など、登山に適した服装

持ち物：リュックサック、水筒、弁当、おやつ、レジャーシート、雨具、
お手ふき、ハンカチ、ちり紙、筆記用具、レジ袋、スパッツ、
その他登山に必要な物

必要に応じて：双眼鏡、図鑑、ルーペ、カメラ、LED ランプ（懐中電灯）、
ストック、1/25,000 地形図は「古峰ヶ原」

費 用：おとな 500 円、子ども 250 円（ガソリン代等）
保険料 おとな 1,850 円（65 歳以上 1,200 円）、
子ども 800 円（来年3月まで）

問合せ・申込み：電話 090-1884-3774（阿部）



文部省『高等國語』（教科書）
（昭和22年10月～昭和23年8月・教育図書(株)発行）

目 録

「高等国語」一上

- 一 藤村詩抄(島崎藤村の作による)
- 二 笛吹川をさかのぼる(田部重治の文による)
- 三 太郎冠者(野上豊一郎の文による)
- 四 記録映画の幻想性(津村秀夫の文による)
- 五 東海道五十三次(岡本かの子の文による)

「高等国語」一下

- 一 案内者(寺田寅彦の文による)
- 二 ガラス障子(正岡子規の文による)
- 三 うつりゆく心(樋口一葉の文による)
- 四 ロダンの遺言(オーギュスト=ロダン原作——深田康算一の訳による)
- 五 言語の本質(安藤正次の文による)
- 六 光栄の作曲家(ジュリアン=デュヴィヴィエ作、
映画「運命の饗宴」より清水晶の採録による)
- 七 うさぎ(志賀直哉の文による)
- 八 春が来た(天野貞祐の文による)

「高等国語」二上

- 一 エッセイ(厨川白村の文による)
- 二 枕草子抄(清少納言)
- 三 談話(モンテーニュ原作——関根秀雄の訳による)
- 四 望郷五月歌(佐藤春夫の作による)
- 五 ペニスの商人(シェークスピア原作——坪内逍遙の訳による)
- 六 万葉集抄

- 七 赤がえる(島木健作の文による)
- 八 自己と独創(三谷隆正の文による)

「高等国語」 二下

- 一 文章を学ぶ者のために(島崎藤村の文による)
- 二 新しいことば
(河井醉茗・蒲原有明・北原白秋・山村暮鳥・野口米次郎の作による)
- 三 農民芸術論(宮沢賢治の作による)
- 四 あるがままに(倉田百三の文による)
- 五 自由を護った人(村上元三の作による)
- 六 源氏物語(紫式部、和辻哲郎の文による)

「高等国語」 三上

- 一 奥の細道抄(松尾芭蕉)
- 二 寒山拾得(森鷗外の文による)
- 三 シェークスピアの女性観(豊田実の文による)
- 四 天上の序曲(ゲーテ原作——阿部次郎の訳による)
- 五 ガラス戸の中(夏目漱石の文による)
- 六 年来稽古(世阿弥)
- 七 国民的文学と世界的文学(土居光知の文による)

「高等国語」 三下

- 一 自然と人生(有島武郎訳「ホイットマン詩集、草の葉」、
魚返義雄訳「菜根譚」、「柴門の辞」、「三冊子」、「去来抄」による)
 - 二 姉と弟(ロマン＝ローラン原作——豊島与志雄訳「ジャン＝クリストフ」による)
 - 三 詩についてぼくらの立場から(中村真一郎)
 - 四 つきあいは格別(井原西鶴「西鶴諸国咄」「日本永代蔵」)
 - 五 富士山頂(橋本英吉「富士山頂」)
 - 六 舞台装置と演出(小山内薫「舞台芸術」)
 - 七 八雲たつ(「古事記」「播磨風土記」「日本書紀」)
 - 八 柱時計(島崎藤村「嵐」)
- 付録 国語学習の手引

鶴聖の河

白坂正治

教科書は「知る」ことの入口であるが「忘れる」ことの入口でもある。幾多の文字が学生の心に文学として根づかないで消え去ったことだろうか。選ばれし誘^{いざな}いは田部重治を物理的な先達にはしたが、精神性は薄めた。それでも人はガイド(案内)ではなく田部を一角に綴る時、教科書の中の田部と会って識^しるべの一步にする。安心、安全、安住、安息、受働の蠢きに田部は容られない。しかし能わざりし田部も浅き深き田部なのである。

教科書と田部といった時「高等國語一上」(文部省・教育図書)は代名詞的で収載の“笛吹川をさかのぼる”を益々代表作たらしめている。推敲の行為も又田部の代名詞だが、初出の「日本アルプスと秩父巡禮」(北星堂・大正8年)から昭和22年の「高等國語一上」まで同作にも異文が見られる。昭和22年以前の資料としては他に「山と溪谷」(第一書房・昭和4年)第一書房戦時体制版「山と溪谷」(同14年)「山と溪谷—紀行篇—」(新潮文庫・同19年)等が挙げられるが、本論文では「日本アルプスと秩父巡禮」「山と溪谷」と教科書文を比較検討したい。つまり教科書文は独立した“笛吹川をさかのぼる”と位置づけるものである。

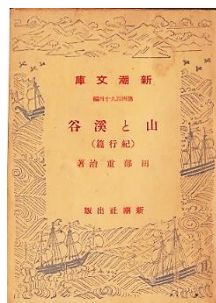
教科書という性質から当然全文掲載ではなく、後半約5ページ半が削除されている。未掲載部は行程に於ける“梓山——枹本”なので“笛吹川を溯る”の核心の抽出。まずは傍線部に視線をやんわり留めながら3つの“笛吹川”を溯行して欲しい。

(次ページへ続く)



←第一書房戦時体制版「山と溪谷」
(第一書房・昭和14年)

「山と溪谷—紀行篇—」→
(新潮文庫・昭和19年)



1 「日本アルプスと秩父巡禮」

笛吹川を溯る

塩山—広瀬—東澤—甲信国境—梓山—枹本

① 汽車で甲府平を通る時、② 笛吹川の荒涼たる流れの姿を見て、誰れか想ひを甲信の境にはせて、渾然として潤ひに充てる其源流の面影や、③ 人為の跡の入込んだことのない完全や、自然それ自身の純一なる調整を想像しうるものがあるだらうか。

嘗て中村君、木暮君と共に、④ 金峯から雁坂までを縦走した時、秩父の範囲で最も自分等を牽き付けたのは、鶏冠山の異様な風姿と、其麓にいやが上に深くひ込める其流域に立ち並ぶ、とけて滴りさうな落葉松や白樺の五月の色彩とであった。⑤ 甲信の境から巖峯にもたれながら此風貌を俯瞰した時、私等の願ひは期せずして、いつかは笛吹川の谷に分け入りたい、そして此谷を甲信の境に攀ちて更に信州梓山に抜けて見たいと云ふことであつた。

其翌々年の5月の末つ方、⑥ 自然は、又も、切実な色彩を以て現ずるに至って、3人は今度こそ昨年果さなかつた笛吹行を是非決行することにした。

新宿の停車場へ30分も早く行って待つて居ると、⑦ 芸術家的衝動が漸やく充ちかつて来た中村君の衝動が、今までの決心を翻へしやしないかとの心配で気が気でなかつたが、しばらくして元気よくやって来る。待遠い汽車がやがて来て、木暮君が鐘馗のやうな顔を汽車の窓から出して居る。⑧ もう3人揃つて心が落着く。汽車が午後11時30分に動き出す。

国分寺あたりから睡気が頻りに襲ふて、八王子とよぶ駅夫の声がおぼろげに聞える。初鹿野、笹子を夢の中に過ぎて、勝沼で2人が頻りと歓声をあげてゐるので目をさますと、夜は既に明けはなれて、南アルプスの主峯斑々たる雪膚を甲府平にあらはしてゐる。それから金峯、それから秩父山脈と、中々忙しい影灯籠の中を、汽車は塩山について、私等は降りる。

私等を祝福して呉れた5月の天候、どこ見ても水々しい青緑のうるほひある色彩、もう心は甲信国境にかけるのみである。

5月といふ月は、毎も私等には抑へることの出来ない自然に対する興奮と憧憬とをそる季節である。燃ゆるやうな青葉の緑のいやますにつれ、緑を綴る花の色が深い永遠のかなたから、暗示的な閃めきを以て無言の響をさやくにつれ、私等にはいつも自然の最も深い、其の生命のとどろき返るただ中に透入しなければならないといふ、必然的な願望が起つて来る。5月の色彩の音楽的融合は、10月の色彩の象徴的

(次ページへ続く)

な閃めきと共に、毎も力強い渴望の対象となってあらはれて、かのギリシャ人の所謂前世の恋の昔に立還らんとする執念さを以て、心はいつもそこへ牽き付けられる。

停車場付近の町らしいところをはなれて、家がまばらに立ってある町がかった村の茶店で、饅頭と古生層のやうな色をした駄菓子をたべる。いつも秩父山塊の中へ這入るときには、古生層のやうな駄菓子を喰ふのが、私等の常規となつてゐる。

思ひ起す数年前、木暮君と2人で7月20日過ぎ、矢張り此の汽車で此道を通つて、雁坂峠から甲武信岳へ縦走をしたことがある。しかし其時は、すっかり曇つて居て、見えるものは笛吹川の流れと向ふ岸の人家とで、前途心元ないやうな想ひに、重い荷物を咄みながら重い足をすめて行つた。それに引き換へて、今日は何と云ふ有難い日だらう。どこを見ても青い空、青い森、青い草、青い水、顧み見れば、青い膚を白く斑にせるは、南アルプスの連峯である。

笛吹川の兩岸が漸次に迫つて、青葉の谷が段々深く、山つじの色其間を点綴する、塩山から柳澤峠へ通ふ道の潤ひなき、なつかしみなき道とは異つて、此の道は趣きに富んでゐる。途中右手にある茶店にしばらく腰かけて、山の上から落つる瀑を見る。足がはかどつて川浦温泉場をいつの間にか通り、有名な一の釜の景色も特別に見やうとする気もなく過ぎ、10時、^{ツラ}円川へ着いて、そこで間食をする。

円川から向ふは人家が無くなり、道は爪先上りとなつて、やうやく勝れて来る。⑩笛吹川の流れを瞰俯する。半里余りで広瀬に達する。今迄の狭い谷が急に広濶な平原状を呈し、道の両側に広瀬の人家が点在して、如何にも寒村らしい面影をもつてゐる。真向ふには、秩父の木賊山^{トクサヤマ}が残雪を頂いて聳立し、破風、雁坂へと連なつて、秩父の山岳の最深の一部を露出せしめてゐる。川を距て、国師岳から派出して居る⑪丘の緑は、融け入るやうに青く、雁坂峠の頂上から広瀬の平原へと巻き降す緑の波は、まだまだ芽生えせぬ赤味を帯びた枝をとりまぜて、いやが上に高くから、幾つも幾つもうねつて来る。⑫10月の紅葉は何うだらうと、たゞそれのみを想いつけて笛吹川の奥へと急ぐ。

広瀬の村を過ぎてから、右を行けば雁坂峠、私等は左に笛吹川に沿ふて道を求めながら行く。

道は山の腰にぶつかりと、⑬俄かに川は左に迂回する。そしてこれから川はそろそろ、其神秘のとびらを開きはじめて、甲府平で見た笛吹川に対する想像は、全く破れて仕舞ふ。仰ぎ見る限り、圧するばかりに重り合う兩岸の青葉の間を、盛んな音を立て、幾多の溪流が笛吹川に流れ込んで、白う閃く厚朴の花は、水の音に絶えず戦慄いて居る。小さな澤を横切ると道を左に下りて河原伝ひに行く。行方を見やれば、水

(次ページへ続く)

青く、白い河原は青葉の谷に埋もれて、はてしも知れず永遠の奥へとかくれ行く。名も知れぬ花が、緑の間を綴るうるはしきは、梓川の溪谷にも勝って美はしく、限りなく続く若葉のトンネルはいつまでも分からぬやうに続いて居る。

流れは二分せられて私等は東澤^{ヒガシザハ}を行く。甲信の境から尽きぬ深林を、曲り曲って来る東澤の流れは、初め想像して居たよりも、遙かに豊富な水量と、遙に雄大な規模とを以て、流れて来るのがやうやう分って来た。若葉の谷が少しづつ暗鬱の気分を帯びて来ると思ふと、そろそろ針葉樹が増して来て、前方には鶏冠山が殆んど登攀不可能の絶壁を以て流れを威圧して居る。東澤の流れは、一は甲武信岳から、一は国師岳の分脈から、も一つは国師岳と甲武信岳との間の連嶺から、密生せる梅の深林を切り抜けて、鶏冠山の麓をうねりうねって、未だ人間に知られぬ^⑩幾多の深潭と瀑布とを形作って来て居るのであらうと云ふ考えが絶えず襲ふて来る。

豊富な流れは、いくら行いても減じて行きさうな様子もない。美しい谿谷は、針葉樹のために暗さが増して来て、兩岸が益々高く、今迄美はしいと思って居た景色に、段々凄味がさして来る。かう云ふ時に、いつでも前途の不安の感じが自然に働いて来て、それが実現さる場合が多い。谷が益々狭って来る。そして水は益々深くなる傾きがある。笛吹川の流れは、遂に人跡を印すべからざるやうにと、自分等の行手に、打勝つことの出来ない障害を置くのではなからうかと云ふ考が浮んで来る。

果然、笛吹川の神秘は俄かに其端を開いた。そして此神秘は永遠に開き尽すことの出来ないものであった。峻険なる山相と凄惨なる溪谷は、絶えず此事あるを暗示はして居たが、斯の如き優秀な形式と、斯の如き高邁な姿態とを以て、それが顕はるとは思はなかった。見よ笛吹川の溪谷は、狭り合って上流の方へ見上ぐるかぎりの峭壁をなし、其間に湛へる流れの紺藍の色は汲めども尽きぬ深い色をもって上へ上へと続いて居る。流れはいつまで斯の如き峭壁にさしはさまれてゐるだらうか。此疑問が私等の胸中に幾度も繰り返された。そして当分は先づ、河原を行く見込のないことが明かになって来た。其故は、見上ぐる限り遙々と鶏冠山と国師からの分脈とが抱き合って作って居る東澤の溪谷は益々陰しく、そして鶏冠山の主峯を通り抜けるには未だ程遠くて、其間の流れが殆んど全部深潭を形つてゐることが想像さるからである。

^⑩私等は一たびは悲しんだが、又嬉しいやうな気がした。^⑪秩父の山(私等の考による秩父の山)の美は、寧ろ溪谷にある。しかし之ほど壮絶な、而もアルプスに見られぬ潤ひを有する溪谷は、何処に見出すことが出来るだらうか。私等は秩父に誇るべき一景を加へたことを喜ばずには居られなかった。(後略)

(次ページへ続く)

2 「山と溪谷」

笛吹川を溯る

塩山——広瀬——東澤——甲信国境——梓山——枋本

①汽車で甲府平を通る人は、②誰でも笛吹川の荒涼たる流れの姿を見て、その渾然として潤ひに充てる源流の面影や、③その人為の跡の入り込んだことのない完全さを、想像し得るものが恐らくはあるまい。

嘗て中村君、木暮君と、④金峯から雁坂までを縦走した時、秩父の範囲で最も私達を惹き付けたのは、鶏冠山の異様な風姿とその麓にいやが上に深くひ込んである笛吹川の流域に立ち並ぶ、溶けて滴たりさうな落葉松や白樺の5月の色彩とであった。⑤甲信の国境から巖峯にもたれながらこの風貌を俯瞰した時、私達の願ひは期せずして、いつかは笛吹川の溪谷に分け入りたい、そしてこの谷を溯って甲信の国境に攀ち、更に信州梓山に抜けてみたいといふのであった。

その翌々年の5月の末っ方、⑥自然は又も、渾然とした色彩を以て現はれるに至って、3人は今度こそ昨年果さなかった笛吹行を是非決行しようといふことになった。

新宿の停車場へ30分も早く行って待っていると、⑦芸術家気分が漸やく充ちかかって来た中村君の衝動が、今までの決心を翻へしやしないかとの心配で気が気でなかったが、しばらくして元気よくやって来た。待遠い汽車がやがて来て、木暮君が鐘馗のやうな顔を汽車の窓から出してゐる。

⑧もう3人とも揃って心が落着いた。汽車が午後11時30分に動き出す。

3 「高等國語 一上」

笛吹川をさかのぼる

①汽車で甲府平を通る人は、②だれでも笛吹川の荒涼たる流れの姿を見て、渾然としてるおいに満てるその源流のおもかげや、③その人為の跡の入りこんだことのない完全さを、想像し得るものがおそらくはあるまい。

かつて中村君、木暮君と、④金峯山から雁坂峠までを縦走した時、秩父の範囲で最も私たちをひきつけたのは、鶏冠山の異様な風姿と、そのふもとにいやが上に深くいこんでいる笛吹川の流域に立ち並ぶ、溶けてしたりさうな、からまつやしらかばの5月の色彩であった。⑤甲信の国境にきつ立つ尾根からこの風貌を見おろした時、私たちの願ひは期せずして、いつかは笛吹川の溪谷に分け入りたい、そして、谷をさかのぼって甲信の国境によじ、更に信州梓山に抜けてみたいということだった。

(次ページへ続く)

その翌々年の5月の末つた、⑥自然はまたも渾然とした色彩をもって現われるに至って、3人は、今度こそ、昨年果たさなかった笛吹川行きをぜひ決行しようということになった。

新宿の停車場へ30分も早く行って待っていると、⑦芸術家気分がようやく満ちかって来た中村君の衝動が、今までの決心をひるがえしはしないかとの心配で、気が気でなかったが、しばらくして元気よくやって来た。待ち遠い汽車がやがて来て、木暮君が鐘馗しょうきのような顔を汽車の窓から出している。(以下略)

☪ 愛書家のひとり言 ☪

アンソロジーとしての教科書

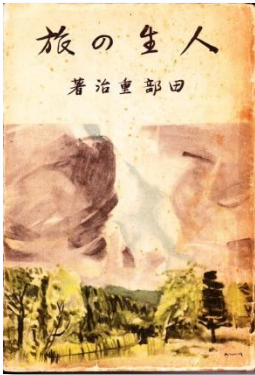
いつか白坂氏がお手紙で書かれていたように、教科書はアンソロジーである。アンソロジーはさまざまな人の書いた、さまざまな文章、ときに一定の分野、項目、趣味に沿って集めた作品集である。私たちは色々な本を読んで、すばらしい本に出会いたいと思う。しかし、本当に感動できる本との出会いは度々あるものではない。アンソロジーはそれなりの識者が読んだ本の中から、これはと思える本を選び、またその中の特にすぐれた部分を集めたものと考えられる。したがって、私たちはアンソロジーを読むことによって、てっとり早く、名作、あるいは、多くの人が高く評価する文章に出会うことができるのである。しかしそれだけでは物足りない。自分が本当に感動できるような文章は、偶然出会った本の中に潜んでいるように思える。書名がわかっていて、ネットで購入した本よりも、たまたま古書店で見つけた本の中に、そのような文章が隠れているような気がする。僕はどりあえず目次を見て、おもしろそうな内容の頁を開ける。これはという文章があったら、ノートに書いておいて、自分が文章を書くときに、いつか使ってみたいと思う。むさぼるように本を読んで、すてきな文章に出会いたい。

人との出会いもまた偶然である。少なくとも僕はそうである。こんな人がいないかと探したわけではない。周りに、偶然出会った人ばかりがいて、もっとも愉快的な人生なのである。

今回、白坂氏から教えていただいた「笛吹川を溯る」という作品。冒頭の部分の文調の美しさをどう捉えたらよいであろうか。さらに重要なのはこの文章が、旅の美しさ、旅の楽しさを表わしていると同時に、これから筆者が分け入ろうとしている地が、およそ人跡未踏の地域でありながら、人の想像しえない、美しい場所であることを暗示している、という点である。筆者はここでさりげなく、読者を奥秩父の深き森へ溪谷へといざなうのである。

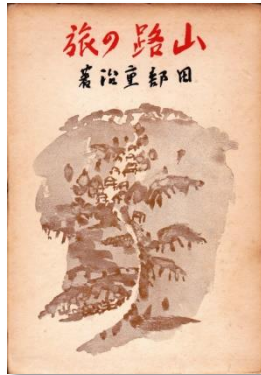
(阿部良司)

次頁に、旅に関する田部重治の著作をご紹介します。



旅の生人
著 治重部田

『人生の旅』
昭和11年11月10日
第一書房



山路の旅
著 治重部田

『山路の旅』
昭和13年10月10日
新潮社



青葉の旅
落葉の旅
著 治重部田

『青葉の旅・落葉の旅』
昭和16年5月30日
第一書房



旅への憧れ
著 治重部田

『旅への憧れ』
昭和17年10月30日
新潮社



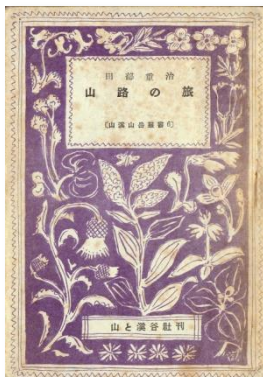
旅路

『旅路』
昭和18年7月25日
青木書店



青葉の旅
落葉の旅
著 治重部田

『青葉の旅・落葉の旅』
昭和19年5月28日
六合書院



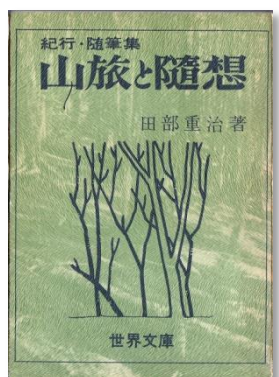
山路の旅
山と溪谷社

『山路の旅』(山溪山岳叢書6)
昭和21年12月20日
山と溪谷社



田部重治著
青葉の旅
落葉の旅

『青葉の旅・落葉の旅』
昭和23年3月20日
東西出版社



紀行・随筆集
山旅と随想
田部重治著

紀行・随筆集『山旅と随想』
昭和44年4月15日
世界文庫

宇都宮・長岡の森ハイキング

2月19日(日) 天気・はれ

宇都宮市在住の野澤辰郎さんに、ご自分のフィールドとして定期的に自然観察されている長岡の森を案内していただきました。

長岡の森からうつのみや文化の森にかけての里山は、団地や大学、美術館、公園が建設されたものの、ありのままの自然も随所に残っています。小高い丘の上にある仏舎利塔の北側に広がる長岡公園から歩道に入ると、そこはグリーントラストにより保護されている森で、小さな谷間に沿って小路が延びていました。所々に湿地があり、ハンノキが赤いイモムシのような雄花穂をぶら下げています。ルリビタキやカシラダカが、藪を出たり入ったりしています。さらに谷を下っていくと、そこには田んぼがあり、谷戸田の風景が展開していました。産廃を埋めた跡地に造られた、という長岡公園に戻り、今度は車で長岡の百穴(横穴墓群)に向かいます。それぞれの横穴墓には後世の作と思われる観音様が彫られていて、中の何体かは如意輪観音でした。さらに瓦塚古墳群に入り、長岡石の採石跡や唯一の前方後円墳を見ました。大きなアセビ(馬酔木)の木がたくさんあり、ドウダンツツジのようなつぼ型の白い花をたくさんぶら下げていました。

もう一度車に乗って宇都宮美術館の前庭で昼食の後、館内を見学して、帰路につきました。



うらかな早春の里山歩き
瓦塚古墳にて

※ 参加者

佐々木伸二、野澤辰郎、石崎隆史・裕子、阿部良司・みゆき(計6名)

※ 見た・聞こえた鳥

カシラダカ、ルリビタキ

※ 長岡・里山歩きの風景

花盛りのアセビ→
ひとつずつが可憐な形↓





←宇都宮屈指の住宅街から
隣接の森に一步入れば
この風景
小鳥の声も賑やか

雑木林に守られるように
冬枯れの谷戸(棚田)が→



前方後円墳の丘を下る



宇都宮美術館の庭のモグラ塚

✿ 参加者からいただいたおたより

長岡の森ハイキング

佐々木伸二

東武線の普通に乗って6駅目の北鹿沼で降りる。この駅はずいぶん久しぶりだ。
思いのほか早く来た阿部さんの車で北小へと向かった。

今回の長岡の森は、地図上で見ると宇都宮の団地の真ん中にある。普通に考えれば、ただの雑木林だし、ハイキングには向かない、と僕自身も思っていた。が、行き先がどこであろうともしばらく行っていないので、僕は迷うことなく「はい」と答えて、来てしまったのであった。

北小で石崎さん夫妻と落ちあい、上田町のコンビニで阿部さんの奥さんをのせ、5人で宇都宮方面へと車を走らせた。

よく考えると、前に山、ハイキングに行ったのは昨年10月の男体山にまでさかのぼる。実に4ヶ月、山に行けなかったってこと。しかし、自宅の近くからは日光連山がよく見える。時に学校、3階理科室前から見る女峰山、大真名子山のながめは目に悪いくらいで…。想像してみて下さいよ、雲一つない真っ青な空を背景に、雪をかぶった日光連山ですよ。おまけにささぎるものなし。それを見て「アー」とか「グー」とか言ってじだんだふんでたら(そんなものがあるのかわからぬが)「山欠」になってしまった。まして、八溝山が2連で延びて、挙げ句の果てに中止なものなので、よけい拍車がかかってしまった。実はこの3日後にはテストがひかえていたのだが…。

やばい、話それた。はじめにもどろろ。宮環を走って、一度宇都宮美術館に行き、

(次ページへ続く)

車を置いたのち、出発点の仏舎利塔へ。

ここであと一人、野澤さんという方と合流した。

いよいよ出発。住宅地の横っちょの小道に入っていく。しかし、明らかにハイカーのかっこうをした人々が住宅地の中を歩いているのはかなり異様だっただろう。ましてや、野澤さんなど三脚に望遠鏡をもっていたからなおさらだろう。

はじめは普通の森の中の道、といった感じだった。しかし、途中で沼に出会うと、すぐに景色が変わり始めた。沢が並行し始め針葉樹の森もあり、植物にうとい僕でもはっきり分かるほど多種多様だった。鳥も気をつけてみると面白い。とはいえ、飛んでしまうので、よく見えぬ。整備用の小屋を過ぎ、クルクル様子の変わる森の中を歩いていたら、きれいな田んぼが現われた。野澤さんは、しっかり整えられていた頃はもっときれいだったと言っていたが、これでも十分美しい。住宅地の中にこんないいところがあるとは初めて知った。そのあと、ちょっとしたヤブこぎのあと、草ぼうぼうのところに出た。やはり、これが現実だ。そのあと、遠くに筑波山をのぞむところで休憩。阿部さんが植物を求める派なら、僕は景色を求める。自分で歩くどどんな景色もスカイツリーの上からの景色より美しく見えると感じるのは僕だけだろうか。

この先、さきほどの沢の反対を回って、出発点から少しはなれた公園へ出た。

車を回して、長岡百穴へ。途中で戦時中に使用されたという穴をちらりと見たのち、百穴の上を歩き回る。穴に頭を突っこむと、ふしぎなおいがした。

また車にはこぼれ、長岡石の石切場のあとや古墳を見つつ歩き、車を残しておいた宇都宮美術館へ出た。

公園のはじで、バーナーを使っておしるこを作る。もうお昼である。途中から音がすごく、道行く人がみなふりかえっていた。

ここで野澤さんと別れ、われわれは美術館へ行き、大谷石の展示を見る。

ここで解散として、僕は阿部さんに駅まで送ってもらった。

けっこうよかったな、長岡の森。こんな森がどこかにあるかな。また、今回行けなかった所も行ってみたい。
(日光市立日光東中学校2年(現在3年))



←長岡百穴

幹線道のすぐそばの山すそに
奇怪な光景が展開する…

穴の一つ一つががつて横穴墓？
いつ頃からか中に
観音像など祀るようになった→



足利・行道山ハイキング
～傑僧行基の足跡を辿って～
3月19日(日) 天気・はれ

案内 続日本紀によれば、行基は和泉の人であり、薬師寺の僧であった。天平勝宝元(749)年2月に没している。

行基は貧困に苦悩する農民の中に入っていた。彼は懸命に“衆生救済”という仏の道を実践した。かれは単に経文だけの僧ではなく、灌漑や土木工事の技術、医術、採葉法までもって、もっとも具体的な形で衆生を済度しようと努力したのである。暗い世情の中にこのように仏灯をともしたかれの情熱と心からの献身ぶりは、さながら菩薩のようだと民衆から慕われた。当時の足利も律令政治下にあつて、民衆は暗澹とした毎日をおくっていたはずである。このような時に、行基は足利にやってきた。行基菩薩行化年譜(牧野至誠著)によれば和銅6(713)年、かれが46歳のときである。行基はこの年に元明天皇の勅命で、大和の菅原寺を立て、それから山城、丹波でも寺を造り、やがて、はるばる東山道を下って下野の地、足利にやってきた。そして行道山を開いた。これは行基が下野国に入って仏灯をともした最初のことである。その後も下野国内の各地に寺をおこし、天平17(745)年には78歳の高令をもってなお、足利・大岩山を開創したのである。

前沢輝政著『足利の歴史』抄

織姫神社に車を置いて、もう1台の車またはタクシーで行道山登山口へ。ここから行基ゆかりの行道山浄因寺、大岩山最勝寺をめぐりながら、足利城跡のある両崖山を越えて、織姫神社に戻ります。

行程 北小——鹿沼IC——東北道——岩舟JCT——北関東道——足利IC——織姫神社①——行道山浄因寺②……石尊山見晴台……剣が峰……大岩毘沙門天……両崖山……織姫神社①——鹿沼

足利・織姫神社に車を置き、タクシーで行道山バス停へ。行基ゆかりの行道山浄因寺は深山幽谷の地にあり、様々な顔をした多数の石仏が、その歴史をしのばせています。三等三角点のある今日の最高地点、石尊山(標高441.7m)にたどり着き、剣が峰(大岩山)を越え、同じく行基の開山になる大岩山最勝寺(毘沙門天)に参詣し、足利城跡のある両崖山を越え、織姫神社に戻りました。

春霞で遠方は望めませんでした。暖かな一日。春の歩みは鹿沼よりも早く、ウグイス、ホオジロ、メジロのさえずりを聞く。ハナダイコン、タチツボスミシ、一輪のみではあったもののカタクリも紫色の花を掲げ、モミジイチゴ、コブシ、チョウジザクラ、そして野生化したジンチョウゲは白い花を咲かせています。鹿沼にはないフユザンショウも見られ



行道山頂にて

ました。足利城跡、両崖山山頂は珍しいタブノキ（イヌグス）の古木の立つ森の中。ここで強風を避けてお昼。下山して鑊阿寺を訪ねようとしたものの、この陽気に誘われてか、足利の街中は多くの人出。駐車場に入るのを諦め、古印最中を買い求めて帰路につきました。

✿ 参加者

佐々木伸二、稲葉幸枝、石崎隆史・裕子、阿部良司（計5名）

✿ 見た植物

（草の花）タチツボスミレ、ハナダイコン、

（木の花）コブシ、ジンチョウゲ、チョウジザクラ（右写真）、
モミジイチゴ、ヤブツバキ、ヤマツツジ

（常緑樹）アラカシ、イヌツゲ、シキミ、シラカシ、シロダモ、ネズミモチ、ヒサカキ、
フユザンショウ、モッコク、ヤブコウジ、

（常緑つる植物）キツタ、ツルグミ、テイカカズラ、

（落葉樹）アオダモ、アオハダ、アカメガシワ、ケヤキ、コウヤボウキ、ネジキ、ホオノキ、
モンゴリナラ、リョウブ



✿ 見た・聞こえた鳥

ウグイス（さえずり）、エナガ、ホオジロ（さえずり）、メジロ（さえずり）、ヤマガラ

✿ 見た虫

ヒオドシチョウ（右写真）



✿ 早春の行道山風景



カンスゲの仲間



ヤブツバキ



フユザンショウ(翼と棘のある葉軸)





ジンチョウゲ

↓モミジイチゴ?



タチツボスミレ



何かの花のあと



カタクリ



行道山



大岩山最勝寺



足利城跡

野州文献好古・1

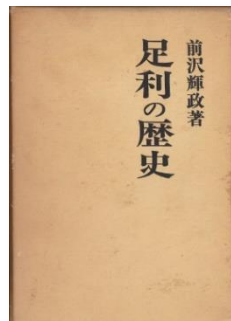
五 傑僧行基の足跡

喪葬令と仏教思想の普及 喪葬令や仏教思想の普及などによって、古墳はようやく造られなくなった。7世紀の中葉、大化2年(645)の喪葬令は新たに身分に応じて5種の段階をきめ、造墓葬送のおごりを禁じたものである。仏教の興隆にともない、8世紀の初頭におこった火葬の制は小さな容器をわずかの場所に埋葬するだけで、従来の石室を築き、墳丘を盛りあげた土葬にとって変わったのである。

足利の古墳築造の終末期は8世紀に入ってからと推定されるが、仏教が足利にもたらされたのは7世紀後半か8世紀になってからであらう。それは大化改新のあとに、律令国家体制とともにもたらされたとおもわれる。

律令制の社会は貴族、豪族たちにはその地位や財産をまもるのに好都合であったが、民衆(良民と賤民とに分けられていたが)は公出挙すいこや私出挙にみるように、国や豪族たちから苛酷な収奪をされて、塗炭の苦しみにあっていた。

「風まじり雨降る夜の雨まじり雪降る夜は術もなく……寒さ夜すらをわれよりも貧しき人の父母は飢え寒からむ、妻子どもは乞ひて泣くらむ……天地は広しといへど、吾がためは狭く



(次ページへ続く)

やなりぬる日明は明しといへど吾がためには照りや給はぬ、人
皆か吾のみや然る……かまどには火氣^{けぶり}ふき立^{こしき}てず、甑^{すべ}にはくもの巢^{よのなか}かきて飯かしく
ことも忘れて……かくばかり術^{すべ}なきものか、世間の道

世のなかを憂^うしと恥^{やさ}しと思えども飛びたちかねつ鳥にしあらねば」

これは万葉歌人のひとり山上憶良が、当時の農民生活をうたった「貧窮問答の歌」である。このうたのように、当時の民衆(おもに農民)はきびしい律令政治のもとで、貧困に苦しみ、人生に絶望していた。ただ、わずかにかれらには前代(弥生・古墳時代)からの祭があった。農耕生産の豊穰を祈る神ながらの民俗が農民たちの心に生きて、わずかに生活をいろどった。それがまた、生きる生命力となっていたのでもある。

奈良の学僧たち 一方、この時代はすでに、奈良六宗(三論、成実、法相、俱舍、律、華嚴)ができており、道照、道慈、行基、良弁そして唐僧鑑真などのすぐれた学僧たちが活躍していた。そして貴族や豪族はこれらの恩恵をうけたが、やはり底辺の農民たちには豪壮な寺院や高遠な教理などは無縁なものであった。

行基はやがて、このような貧困に苦悩する農民の中に入っていった。かれの師である道照は「天下をめくりあるき、路傍に井をうがち、諸々の津湾のところ船をもつけ橋を造った」(文武紀)と伝えられているが、かれはさらに、懸命に“衆生救済”という仏の道を実践した。続日本紀によれば、行基は和泉の人であり、薬師寺の僧であった。天平勝宝元年(749)2月に歿している。また「都いなかをめぐりあるいて、衆生を教えみちびく、道俗は化を慕い、追いつく者はややもすれば千を以てかぞう。行くところ和尚の来るを聞けば、巷に人の居るなく、争い来りて礼拝す。また、みづから弟子たちをしたがへて、諸の要害^{おも}の処において橋を造り、つつみを築くに、聞見の及ぶ所はことごとく来りて功を加へ、日ならずして成り、百姓は今に至るまでその利を蒙る……」

とある。かれは単に経文だけの僧ではなく、灌漑や土木工事の技術、医術、採薬法までももって、もっとも具体的な形で衆生を済度しようと努力したのである。暗い世情の中にこのように仏灯をともしたかれの情熱と心からの献身ぶりは、さながら菩薩のようだ、と民衆から慕われた。

当時の足利も律令政治下であって、民衆はさぞ暗澹とした毎日をおくっていたことだろう。

行基が足利にはいる このようなときに、行基が足利にやってきた。行基菩薩行化年譜(牧野至誠著)によれば和銅6年(713)、かれが46歳のときである。行基はこの年に元明天皇の勅命で、大和の菅原寺を建て、それから山城、丹波でも寺を造り、やがて、はるばる東山道を下って下野の地、足利にやってきた。そして行道

山を開いた。これは行基が下野国に入って仏灯をともした最初のことである。

その後、神亀元(724年)には塩谷郡、剣ヶ峯の麓に観音寺をおこし、天平7年(735)にはまた、足利に行基堂を開いている。ときに68歳。その年に安蘇郡、鳥谷にも永代寺を造った。さらに天平14年(742)には芳賀郡、高岡の安楽寺、同年、下都賀郡、富山の清水寺を開いた。そして、天平17(745年)には78歳の高令をもってなお、足利・大岩山を開創したという。

行道山 行道山は市街地の北郊、月谷の山里の最奥部にある。南から月谷川に沿ってこの山里に入っていくと三方が山なみに囲まれる。そして正面の高い連峯が屏風のようにせまってくる。この連峯は周囲の山々より一きわ高く、大きく、屹立した山塊で、そのおもむきのある山容はかなり遠方の平野部からも望まれる。

行基が東山道を太田の方から足利に向かって下ってきたときに、足利の山なみの中で、一きわ目立つこの連峯に、まず注目したのにちがいない。そして、やがて行基はこの連峯を開くことになった。

いま、連峯の南部は大岩山または毘沙門山、北部は行道山と呼ばれる。が、これは行基が大岩山の中腹に毘沙門堂(大岩山最勝寺)を行道山中に堂宇(浄因寺)を草創したためである。

さて、月谷の山里を北に深くはいると、菅沢の人家がきれいから急な山道にかかる。路傍に立つ「行道山」の大石柱を過ぎ、さらに山道をすすむと、沢をうづめる杉の大木で空はますます小さくなる。いつか山道は段々の石段にかわり、かたわらの山腹には地蔵尊の石仏群があらわれる。あたりは静寂そのものであり、まことに深山のおもむきをなしている。ここはもう行道山浄因寺である。

山門をすぎ、さらに曲折する石段を上ると、頭上高く、天におかかって大絶壁がそそり立っている。この突兀たる岩壁の頂上に「寝釈迦」と呼ばれる聖地がある。ここは行基の遺骨が埋葬されたところだという。

行基は日本諸国をめぐり、畿内の49ヶ所をはじめ、770以上の寺院をつくったという。このおどろくべき熱烈な仏法(救済)運動もその初期の頃は聖武天皇ら朝廷から武力をもっておびやかされた。しかし、いかなる受難にあってもひるまず説法を続けたかれを、こんどは朝廷側が当時の社会不安をのぞくために起用した。やがて行基は大僧正の位をおくられ、東大寺大仏殿の建立にも力をつくした。のちには大菩薩の号もおくられ、82歳で大往生をとげた。

(前沢輝政著『足利の歴史』昭和45年11月・明善堂書店)

石裂山・千本かつらハイキング
～加蘇山神社に拝して千本かつらへ～

4月23日(日) 天気・はれ

案内 加蘇山神社より石裂山に至る参道は谷沿いにあり、多くはスギの植林地であるものの、主にチャートといわれる硬い岩石で構成されるこの山には、他ではなかなか見られない植物が生育できる特殊な自然環境があるものと思われます。特にこの季節は心惹かれる美しい花の見られる季節。カタクリ、キクザキイチゲ、ヤマルリソウ、フタバアオイ、トウゴクサバノオなどの花が見られるかもしれません。網を持って行って、水の生き物も調べてみましょう。四足でしっぽのある、可愛いあの子がいるかしら？ 今回は主催者の都合により、午後1時解散となりますので千本かつらでお弁当を食べて帰ってくることになります。どうぞお出掛け下さい。

行程 北小——加蘇山神社社務所——加蘇山神社①……竜が滝……あすまや……千本かつら(昼食)……加蘇山神社②——北小

加蘇山神社の駐車場で宇都宮の野澤さんと合流し、まずはオオルリのさえすりの響く中、階段を登って加蘇山神社境内へ。「三代実録」に「元慶二年九月十六日戊申に下野国加蘇山ノ神従五位下を授く」とあり、加蘇山神社の御鎮座が元慶2年、すなわち西暦878年以前であることがうかがわれる。鹿沼では最大と思われるスギの大木を見る。この季節、アカヤシオを目当てに遠方から来られる登山者も多く、この日も駐車場は満車。最後の空いたスペースに運転手つきのバスが2台入ってぎゅう詰め状態。団体の御仁は山頂目指してひたすら登山道を登っていくが、我々は時々水辺に降りて植物観察。最も美しい花の咲く季節、千本かつらまで登って帰ってきた我々ではあるが、見た花の種類は24種、充実した植物観察会であった。

帰路の途中、野澤さんに加蘇鉱山跡を案内していただいた。「加蘇鉱山大通洞」と書かれた坑口から冷たい風が吹いて来ることは知っていたが、その上流側の山の斜面に採掘された岩石(主にマンガン)を送り出すための施設、また川の真ん中にそのトロッコを走らせるためのレールを支えていた太い柱があるのに、今さらながら気付いたのである。稲葉さんは、「これも戦争の傷跡なんだよ」と教えて下さった。このような山中の鉱山の労働力の中心となっていたのも主に朝鮮人労働者であったことに、目をそむけることはできないのである。



加蘇鉱山跡にて

※ 参加者

佐々木伸二、稲葉幸枝、石崎隆史・裕子、阿部良司（計5名）

※ 見た植物

（草の花）アカフタチツボスミレ、イワウチワ、オオバタネツケバナ、カキドオシ、カテンソウ、カメバヒキオコシ、コガネネコノメソウ、コチャルメルソウ、コンロンソウ、ジロボウエンゴサク、タチツボスミレ、ツルネコノメソウ、ネコノメソウ、ハルトラノオ、フタバアオイ、ミツバコンロンソウ、ミヤマキケマン、ミヤマハコベ、ムラサキケマン、ヤマハリソウ、
（木の花）アカヤシオ、モミジイチゴ、ヤマツツジ、ヤマブキ



※ 見た・聞こえた鳥

ウグイス（さえずり）、エナガ、ホオジロ（さえずり）、メジロ（さえずり）、ヤマガラ

※ 見た生き物

オタマジャクシ（アズマヒキガエル？、写真→）



※ 千本カツラ周辺の春の花図鑑



カテンソウ



イワウチワ



ミヤマハコベ



ハルトラノオ



アカフタチツボスミレ



ミツバコンロンソウ



オオバタネツケバナ



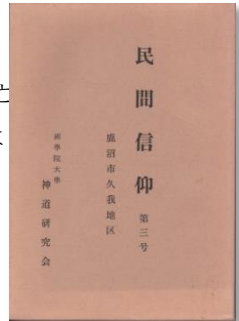
ヤマハリソウ

加蘇山神社由緒沿革

加蘇山神社の文献上の初見は、『三代実録』に「元慶二年九月十六日戊申に下野国加蘇山の神従五位下を授く」とある。これより加蘇山神社の御鎮座は元慶二年以前であることが伺われる。社伝によると、神護景雲年中日光開山勝道上人が当社の岩窟に靈威を蒙らんと数旬の間、起臥したと伝えられている。

当神社は、磐裂命・根裂命・武甕槌男命三柱を御祭神として五穀豊穰、商売繁盛の神として、近郷の村々から崇敬を受けた。降っては永承年間には、源頼家父子の奥州征討に際して当社に参籠祈願したところ大勝を得ることができその返礼として自身の鎧・大刀等を奉納し、さらに源氏の武運長久を祈願するに及んでは、中世を通じて兵馬の神として崇敬をけるに到った。往昔より近郷の村は皆、氏子とされて社田二百町歩を神饌料とし、社領ことのほか多く社頭はその繁昌を誇ったが、永禄年間久我式部常真が当地に一城を築くに及んでは社領の略奪を行ない、神威その輝きを失せるかの觀を呈した。天正年間、久我氏滅亡により再び社領は旧に復したが、久我氏専横の間の社頭の廢退はすさまじく、往古の賑わいを回復することができなかった。承応年中一品親王、日光山へ御入れの折、當舎の廢退を憂い、當舎を直轄とし、世襲であった神職五家を優遇し、毎年春秋二回特使を派遣して当社を視察することを例とし、明治までに到った。

(国学院大学神道研究会「民間信仰」第3号——鹿沼市久我地区、昭和56年3月)



石裂山登山口にある
加蘇山神社本殿前にて



↑水边によく見られる
ネコノメソウの仲間たち
左からネコノメソウ、
コガネネコノメ、
ツルネコノメソウ



「加蘇山大通洞」、冷風が噴き出す→

奥多摩・惣岳山ハイキング

4月2日(日) 天気・はれ

今年も春休みは高尾山、と決めていたが、寸前になって、どこか行ったことのない山に行ってみたい、との思いから武蔵御岳の1/25,000地形図を俯瞰する。高水山というのがあり、近くに岩茸石山と惣岳(そうがく)山がある。ははん、これが有名な高水三山だな、惣岳溪谷は惣岳山から来た地名か、と納得する。惣岳山には東南東に延びる沢があり、沢井という集落に降りて来る。沢沿いに登山道があるようなので電車は軍畑(いくさばた)で降りると都合がよさそうだ。沢沿いの道だから早春の草花が楽しみだ。軍畑で降りて、沢の入口を探しながら西進する。沢に入ってしばらく林道歩き。残念ながら期待していた草花はほとんど見られない。林道終点に着くと右に真新しい山道がつけてある。その急斜面につけられた山道をひたすら登り、たおやかな尾根上に出た。山道はあるが、人通りの少ない道であることは見ても明らかである。展望のひらけた所からは岩茸石山と高水山が平溝川を隔てて聳えている。しかし、あれを全部踏破するのは無理かなあ〜。登り着いた尾根は標高614mの平らな小ピークであつたらしく、いったん下り坂となる。さらに登りかえして一登りで山頂か、と思いきや、山頂領域は広く、いくつかの山道が交差していて、どっちが山頂で、どっちが下山道なのかわからなくなる。地形図などを見て、しっかり現在地を確認しながら行動しなければならない山である。実はどこの山でもそうなのであるが。

山頂は青渭神社の広い境内である。アセビの大きな木にたくさんの白い花が見える。アセビの花がさかんに咲いている、ということは、やはり、今年は春の訪れが遅いということ。沢沿いに花が見られなかったのもこのためであろう。他の二山はあきらめ、沢井駅目指して降り立った所にも青渭神社があつた。駅目指して歩く途中、大きな木に黄色い花が満開のように見える樹木が見えた。帰宅してピバモール付近を車で走っていて、これがハナミズキであるらしいことが分かった。この季節、葉が黄色くなるものらしい。あるいはそういう品種なのか。

なお青渭神社は稲城市東長沼にもあります。江戸時代までは近くの青沼から出現したご神体をまつたことから青渭(あおぬま)大明神と称していましたが、明治初年に青渭神社と改称しました。青渭神社はこのほか調布市深大寺元町にもあります。



←植林地をひたすら登る
植林地が広がる
↓東京の奥山



←青渭神社

↓ミツマタも花盛り



鹿沼学舎・北光自然観察クラブ共催
初夏の夕日岳ハイキング
～鹿沼の最高地点（1526m）を目指して～
6月4日（日） 天気・はれ

古峯神社発行の由緒記によると、日本武尊東征の折、臣下の藤原隼人が土着して鎮祭し、日光山の開祖勝道上人の修業を助けたのが、宮司石原氏の先祖だという。別の伝承では、古峯神社は石原氏の氏神（屋敷神）であったのが大きくなった。その隠居が金剛山を信仰するようになり、神社と寺とが分れたともいう。古峯神社に氏子はない。講によって維持されている。関東・東北を中心に信仰があつく、嵐・火災・盗難・海難よけの神として知られている。勝道上人が日光に入るとき、塩沢を通過して古峯原に出る旧道を通ったと言ひ、その道をよく坊さんが通って行った。塩沢の上沢芳房家の隣家には庭に五輪塔が多くあり、これは坊さんの墓だという。上人とその弟子の遺徳をたたえる花供峯の行事がある。一時すたれたが、明治百年事業で復活した。春・冬にあったのが春だけになった。みな山伏の姿で歩く。



「民俗採訪／栃木県鹿沼市旧西大芦村」(国学院大学民俗学研究会刊)より
案内 山に道を求めるのなら沢治いの道。水は地面を潤し、鳥は水呑みに訪れ、カエルやサンショウウオは出会いを求めて集まります。イワナ等の魚はもちろん、さまざまな昆虫幼虫の生息する所。そして、美しい花を求めるにも、水辺に限りますね。この季節、夕日岳稜線上に多くの登山者を見ますが、たいていの人は旧細尾峠に車を置いて夕日岳を往復します。でも私たちは古峯神社に参詣して歴史を学び、あえて勝道上人も歩いたであろう、急登を選びましょう。ハガタテ手前の大芦川源流部は湿地帯となっていて訪れる人も少ない。美しい花は、そんな所に咲いているものです。登った甲斐のある山になると思います。

行程 市役所——古峯神社大駐車場……林道入口……林道終点……ハガタテ平……地蔵岳……三ツ目……夕日岳……地蔵岳……林道終点……古峯神社大駐車場——市役所



「古峯神社の創立年代は明確ではない。もちろん、古峯神社という呼称が行なわれるようになったのは神仏分離以後のことである。それ以前は、古峰ヶ原と呼ばれ、多くの伝説で知られていた。(中略)



登山口にて「熊注意」の看板に緊張の持ちち

古峯ヶ原が勝道上人の修行の地であり、日光山全山26院80坊の僧達が、代々古峯神社を中心とした古峯ヶ原で登山修行することになっていた。古峯神社はその僧達の宿所となり、石原家はその世話をしたのであり、それは、勝道上人が修行したときに、石原家の者が世話をしたことに始まるという。勝道上人の頃は藤原姓を名のっていたが、中世に石原と改めたのだという。」 「古峯ヶ原の民俗」(栃木県教育委員会)より



鹿沼の最高峰、夕日岳山頂にて

鹿沼学舎と北光クラブから集まった私たち8名は、勝道上人も宿坊として利用していたという古峯神社に歴史を偲び、勝道上人以降、日光山の僧達の修行の場であった禅頂行者道を鹿沼市の最高峰夕日岳目指して登りました。

この日、ゴヨウツツジ、アカヤシオ、トウゴクミツバツツジの花はすでに終わり、登山者は少なかったものの、湿地にはこの日一番のお目当てであったあの花が一面に咲きみだれ、タニギキョウ、マルバコンロンソウ、ウスバサイシン、ヒメウツギ、ベニバナノツクバネウツギ、サラサドウダン、ヤマツツジ等の花が見られました。夕日岳への稜線上にはミヤマザクラがたくさん蕾を付けており、稚内でエゾヤマザクラ(オオヤマザクラ)が開花して、あたかも消えたかのように言われるサクラ前線が、山の上では今も健在で登り続けていることを知ります。

奥白根山でチシマザクラ(ミネザクラの変種)が咲いて、本当の最終地点に到達するのも、間もなくのことです。

※ 参加者

赤羽根幸子、梅原トシ子、西澤美智子、川津 聡、五月女紀土、石崎隆史・裕子、阿部良司(計8名)



あの花、クリンソウ

※ 夕日岳初夏の花々



ウスバサイシン



ギンラン?



ヒロハコンロンソウ



クワガタソウ



ヒメウツギ



快晴の空の下、男体山がすぐそばに見える



日光の山々もくっきり

活動報告・番外編2

鹿沼三十三観音巡礼

6月17日（土） 天気・はれ

案内 塩入安三郎著『鹿沼三十三観音』を頼りに鹿沼市内の観音様を巡る一環です。月に一度の木造千手観音菩薩立像（鹿沼市指定文化財）の御開帳に合わせ、今回は北赤塚の広済寺を訪ねます。PM1:30より住職による読経があります。



普段は無住の寺というこの日も「住職」出張中のため県南の寺から留守番の僧侶が来ていた

活動報告・番外編3

会津田代山ハイキング

6月18日（日） 天気・くもり

案内 日光国立公園より尾瀬が独立し、尾瀬国立公園が誕生した際、会津駒ヶ岳と田代山がこれに加わりました。今回は帝釈山まで足を延ばし、オサバグサを観察します。オサバグサはしだ類のシシガシラやオサシダの持つ、くし状の葉がそっくりですが、もちろん種子植物なので白い美しい花を咲かせます。

行程 鹿沼（北小）——土沢——今市——山王峠——東武会津高原駅——湯ノ花温泉——猿倉口（15分）……水場（60分）……小田代湿原（20分）……田代山湿原入口（10分）……田代山（15分）……田代山避難小屋（70分）……帝釈山（往復）

❁ 参加者

梅原トシ子、西澤美智子、石崎裕子、阿部良司（計4名）



満開のチングルマ



“名物”オサバグサ

雪を頂いた山々を背景に→



野州文献好古・3

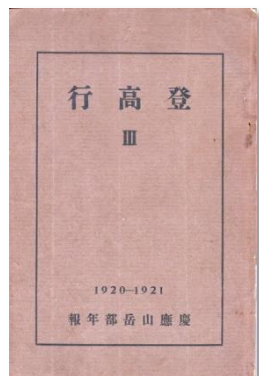
田代山

7月29日 晴一雨

起床5時半。出発6時40分。晴れては居るが遠望の利かない厭な天気だ。道は土呂部へ通じて居て往来も可なりある故か中々好い、然し水引を過ぎ日詰滝から10分許りで右から伯母岐沢が這入って来る、そして之に就て尾根に登り其を伝って田代山頂に行ける相だが藪が中々ひど相だから少し遠くても土呂部道を今少し行って製材所の所から近頃或る人が弘法大師を山頂に祀る為に作ったと云う登山路を執ることにした、伯母岐沢から2時間許りで製材所に着いた、少し昼には間があったが此処で湯を貰って食事をした、そして僕達が茶を生憎忘れて来たこと云った所が早速山の中で寂しいでせうからと云って沢山呉たりして非常に親切に待遇して呉れた、そして色々話込である中に心配して居た雨が到々やって来た、製材所の人も非常に心配して呉れて布団も沢山あるしするから態々山の上で泊らなくてもゆっくり此処で天気を待って出掛けたらどうです等と種々親切に言ってくれたが好い塩梅に12時頃になって大分小降りになって来たので厚意を辞して出発する、道は直ぐ製材所の側から登り出す、可なり急な登りだが霧の様な雨が降っているのので涼しくて割に息が切れない時々大粒の雨がやって来ると大きな梅の木の下で之を避けた。頂上に近づくと従って倒木が多くなって来た、然し大した事もなく丁度2時小さな田代(当地方に於ての湿地の称呼)を越すと15分許りで頂上に達した、霧雨が煙って居るので囲りは何も見えないが広濶な芝生の様な頂は西南より東南に向つて極めて緩い傾斜をして居て所々に透き通る様な水を湛えた小さな池が夢の様に点在して居る、頂上の真中頃に来た時又大粒の雨がやって来た、今度は中々猛烈だ、一寸止み相にもないので三角点のある所とは反対

の西南隅に在る弘法大師の祠へ避難した、小さな祠だが2人位が雨止みをするには充分だった、然し雨は益々猛烈になつて来る許りで日光方面に聞えて居た遠雷も段々近づいて来て遂には殆ど閃光と同時に其響音は峯から峯、谷から谷に鳴渡つて静かな美しい此頂きの平和も忽ちにして悪鬼の荒れ狂ふのに蹂躪されてしまった。今日は出来るならば帝釈山を越えて馬坂の鞍部迄行かうと思つて居たがもうとてもそれ所ではなかつた、只小さくなつて此の大自然の威嚇の静まるのを待つより外仕方がなかつた、約3時間許りの後流石の雷雨も段々と黒い雲を分散し其の怒りを静めて行つた、そして時々は雲間に青い空をさへ見せる様になつて此の頂きも再び前の平和に復した、僕達は野営地を探す為に又元来た道に戻つた、今避難して居た祠は燃料や水に乏しかつたからである、三角点の直ぐ附近に朽ちた古い小さな祠がある、それを今日の仮寝の宿とした、宗七は直ぐ大きな鋸を肩から下して燃料や白檜の皮を剥ぎに行つた、僕は荷物や何かを整理して置いて日の暮れない中にと再び広い草原の様な頂上へ出て見た、1時間許り前迄は黒雲にすっかり閉されて居た四辺も西から北へ掛けては完く霽れ渡つて直ぐ眼の前には會津駒が夕日を逆を受けて何とも云えない美しい色彩を帯びそのなだらかな長い尾根を右に三ツ岩、窓明山の方に迄延ばして居る、そして大津岐峠の少し右の方へ魚沼駒が一寸頭を出し左へ順に中ノ岳、兎岳、平ヶ岳等が皆夕焼した窓に其上半身を濃い紫紺色に染め出して居る、そして夕日を浴びたこの田代山頂も此等の絵の様な大観を前にしてより一層美しく輝き出された、緑の濃い針葉樹を背景に点在した池をキンカウクワ、イワゼキセウは黄白に、チシマリンドウ、ヤマトキサウ、ツルコケモモ、ヒメシヤクナゲ等は紅紫に皆眼覚める様な色彩を以て点綴して居る、そして僅かに短い春を此の山頂に与へられた此等の可憐な草や花には一刻でも暮れて行く日が惜しい様に見えた。自分は只此の自然の美に打たれて感嘆の辞さへ忘れて居た、そして露营地の事をも忘れて居た、後を振り返ると栗山の方の谷から段々襲つて来る夕霧を通して露营地の煙が盛んに上つて居た、急いで帰ると露营地ではもう焚火が勢好く燃えて飯も味噌汁も出来て居た、そして2人切りではあつたが非常に愉快的な美味しい晚餐を済して眠りに就いた時分には山頂はスッカリ霧に包まれて冷々とする風が壁代わりに立てた白檜の皮を煽つて居た

(「登高行Ⅲ」(慶應山岳部年報 1920-1921)所収、
三田幸夫筆「越後銀山平より会津の山旅」より)



※ 田代山花図鑑(見た順)



エンレイソウ



ニリンソウ



ラショウモンカズラ



ベニサラサドウダン



オオカメノキ



ミツバオウレン



イワカガミ



イワナシ



アズマシャクナゲ



タテヤマリンドウ
とミツバオウレン



チングルマ



イワカガミ



オサバグサ



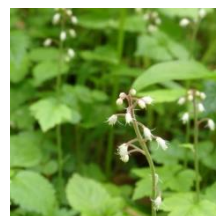
コミヤマカタバミ



ゴゼンタチバナ



シウリザクラ



スダヤクシュ



??? (綿毛)



シャク



ミソホオズキ

☪ 里山紳士交遊録 ☪

前号「あとがき」でご紹介した野澤辰郎氏とは、その後も活動を共にしたり（本号活動報告にも度々ご登場）メールをやり取りしたり、趣向を同じくする仲間としての交流が続いています。自然関係の話題がちりばめられた交換メールから一部をご披露します。

（♠は野澤氏、♣は阿部）

——2月19日長岡観察会の後、初参加の野澤辰郎さんからのメール。

♠…19日の観察会はお世話さまでした。天気に恵まれ同じ趣味の仲間たちと楽しい1日有り難う御座いました。まだまだ知らない植物等が沢山あり阿部さんの造詣の深さにまたまた、感心しています。鹿沼の自然にも興味あり、付近の観察会が有るときにはお知らせメールを頂ければ参加させていただきますので、宜しくお願いします。お世話になりました。（野澤 2/21）

——観察会参加の報告感想文をお願いしたのですが…

♠…原稿の件はエクセル、ワード共に使えませんし、文章力全くなし、ですので阿部さんにお委せ致します。あまり人の好んで行く場所はこのまず、特に群れたがらない性格の偏屈者ですので宜しくお願いします。（野澤 2/21）

——自然観察クラブのご紹介も兼ねて会報最新号（48号）をお送りしました。

♠月報を頂き有り難う御座いました。内容かなりの充実度ですね。楽しく拝読させていただきました。私もフォークファンなので特集ボブ・ディランは興味ありでした。日本のミュージシャンにこれほど影響を与えたひとは少ないのではないのでしょうか。次回の山行は行けませんが、機会があったら参加させていただきます植物、樹木等教えて下さい。（野澤 3/12）

——宇都宮在住者ならではの情報もいただきます。

♠…今日は八幡山にあった旧火葬場が「戸祭山緑地」として整備され、グリーントラストが緑地保全し、整備されたとの記事を見て、出掛けてみました。宇都宮のトラスト地域が3カ所になり、自然観察、ウォーキング等々には市民にとって良い場所が増えたかなと思います。東京サンショウオの生息地もあります。ゆっくり歩くと2時間位です。野鳥が意外と多く見られ、私も子供の頃に鳥をとり遊びに行った場所でした。新しいパーキング、トイレも新設されていました。所在地「宇都宮市山本町 383-1」（野澤 3/19）

——ちょうど足利・行道山へ出かけて来た日。早速お返事と、併せて新たな観察会のご案内を。

♣情報ありがとうございます。先日も野澤さんから聞いたトウキョウサンショウオには注目しております。そんな町の中にわずかに残された環境の中で生息できるものなのでしょうか。不思議です。鹿沼でも里山を調べてみる必要があるな、と考えております。今日は足利行道山に行ってきました。ウグイ

（次ページへ続く）

ス、ホオジロ、メジロの囀り、タチツボスミレ、ハナダイコン、1輪ではあるがカタクリも紫色の花を開き、モミジイチゴ、コブシ、チョウジザクラも白い花を広げていました。4月は16日、石裂山の予定です。お出かけください。(阿部 3/19)

▲メール返事遅くなりました。足利の山は如何でしたか。天気がよくてよかったですね。4月の石裂山は参加させていただきますが、自由業ゆえに、仕事が入ってしまうと不参加になります。その場合は出来るだけ早く、連絡します。宜しく願います。(野澤 3/21)

▲おはようございます。足利行道山は鹿沼よも春がずっと進んでいて、ウグイス、メジロ、ホオジロが囀り、ハナダイコン、タチツボスミレ、コブシ等がすでに開花していました。フユザンショウを初めて見ました。4月の石裂山、第三日曜日では、アズマヒキガエルの産卵はすでに終わっていると思われませんが、サンショウウオが見られると思います。網を持って行きますので、野澤さんにぜひ、トウキョウサンショウウオとの違いを教えてくださいたいと思います。石裂山にはかつてウラジロヒカゲツツジがあったそうです。大半が盗掘され、ここではほぼ絶滅状態。それでも残っていれば、ちょうど開花の季節。ここに、近い種類のヒカゲツツジはないので、薄黄色のツツジが咲いていれば、ウラジロヒカゲツツジの可能性が高い。双眼鏡で岩場を探りながら歩みを進めたいと思います。最高地点月山を目指す尾根上にはミヤマシグレがあります。まれに見る植物(低木)だと思います。石裂山は鹿沼では最も植物の面白い山、と言えると思います。4月中旬、季節も申し分なし。楽しみに致しております。(阿部 3/22)

▲有り難う御座います、フユザンショウ初めて聴きました。双眼鏡は持って行くつもりです。私は少し早いかと思いますが岩場にあるセッコクの開花を見たいこと。石裂山は、「加蘇鉱山」はじめ、鉱物も面白い場所ですよ、楽しみです。(野澤 3/22)

▲フユザンショウ、たしか大岩毘沙門天の近くに説明版があり、暖地性の植物の一つという。鹿沼の私が見たことのないのも当然ですよ。3または5枚の羽状複葉、葉軸にヌルデのように翼があり、対になっている小葉の基部に上向きの刺があります。セッコク、石裂山の大きなスギの木の太い枝の上にセッコクがありますね。台風のと、落ちていろいろですよ。杉並木でもそうらしい。私は小学生のころ、父について西大芦の山に行きました。林道から山に登っていくと岩場となり、棚状になっているところにはすべて、白い花を付けたセッコクがへばり付いている、という光景をありありと覚えています。その場所はどこなのか、それを調べるという意味もあって、今年は何回か西大芦の山に入っています。この地域の山は案の定、岩場や滝が多い。先日、そうとうやばい目に遭いました。みっともないから言いませんけどね。西大芦の山は近寄りたがたい。でも、そういう山ほど、知られざる魅力があります。人もそうですよ。(阿部 3/22)

▲阿部さんの「かなりやばくて人には話せない話」、同じような経験がある我が身にとっては、思わず食い入っていました。思い出しては若かったなあと思わず苦笑いでした。が70を過ぎたこの歳になっ

ても岩場や登山者が余り行かない場所を眺めると血が騒ぐ危ない老人です。これからは雑木林歩きがふさわしいのかも知れませんね。(野澤 3/23)

◆今晚、昨日は仕事で東武日光線の明神駅の近くに行きました。みぞれ交じりの天気で気が重かったのですが、仕事ではいたしりたないのですが、仕事を早めにかたつけて付近を流れる行川をみてきました。帰ってから地図を見ましたが、かなり長い川ですね。自分にとって馴染みのない川なのでこの川の上流探索も面白く思いました。(野澤 3/28)

◆こんばんは。明神駅の東京側隣、下小代駅の近くにシモツケコウホネ自生地があります。行川と黒川の合流地点は見野橋の少し下流にあります。僕は川の合流点を探索するのが好きです。南摩川が思川に、大芦川が思川に、黒川が思川に、姿川が思川に、思川が渡良瀬川に、合流する地点、脳裏に描くのはなかなか難しいものです。石裂山は4月16日とご案内いただきましたが、その日は町内の神社の祭りで、今年は我が班が担当であることがわかり、23日に変更致しました。勝手千万、申し訳ありません。季節としては9日のほうが良いのですが、なにしろ子供相手に始まった会なので、春休み明け間もなくはどうか、ということです。飽きずにご参加ください。野澤さんとのメール往来は有意義だと思いますので、新しいコーナーを設けて掲載させていただく予定です。ご了解ください。那須の雪崩遭難。なんとも悲しい限りです。(阿部)

◆次回の観察会の延期了解致しました。まー余り若くはありませんのでお互いに無理のないスケジュールで行きましょう。那須の雪崩事故発生は、まことに痛ましい限りです。特に若者の事故、私が替わられる物ならばと思っております。独身時代でしたが、私もこの辺りで表層雪崩で私と友人と流された事を思い出します。「稻荷沢」でした。同じ時期、大事にはいたりませんでしたが紙一重でした。(野澤 3/28)

——石裂山に行ってきました。

◆石裂山は大変楽しく貴重な植物に出会う事が出来、感動してます、さすが阿部さんだなー、あの場所の時期を熟知してますね。添付の写真は前日お知らせした、宇都宮市旧火葬場跡地の戸祭山のグリーントラスト地内で見かけた「エビネ」ですが、目印の竹の棒に白いビニールテープが巻いてあり、グリーントラストの会員が皆に見せたくマークしたものかと思ったりしてますが、まさかこんな町の中にエビネがあるとはと不思議におもってます。もかしたら自生していた物が、盗掘に会わずに残ったものか。10株近くあり、又誰かが植えた物かとも思ったり想像を膨らませています。半日陰の腐葉土の沢山あるけこうな急斜面でした。阿部さんはどう思いますか？(野澤 5/2)

◆こんばんは。石裂山はこの春の寒さのためか例年よりも花は遅れ気味で、回らずも好機となりましたね。僕は特にイワウチワが見られたのを喜んでます。逃したサンショウウオは結構大きかったので残念。エビネの件。僕が見たことのあるエビネといえば、秋とか冬とか、実が付いていたのでそれと判断したのですかいずれも7株。この花の季節、しかも10株近くというのは羨ましい限り。これが自然

(次ページへ続く)

に生えてきたものなのか、あるいは人が植えたものなのか、それは重要な問題ですね。僕は昨年、3年生に樹木の観察を指導したとき、樹木を見たとき、その樹木が鹿沼の山にもともと生育しているものなのか、あるいは鹿沼にはないものを持ってきて植えたものなのか、判断できるようになってほしいと話しました。守るべきはありのままの自然ですね。それは大久保寛太郎氏から学んだことです。発見されたエビネが道から離れていて、人がまず入らないような場所でしたら、急斜面ということもあり、野生と考えたいですね。一地域の植物を案内する植物図鑑があります。2～3年前、古賀志山の植物図鑑が地方出版社から出版されました。この図鑑の中にエビネが載っていました。僕はそれを見て、この図鑑は信頼できないものだ判断してしまいました。ニホンサクラソウなんかもうですね。野生なんかあるはずないという、固定観念があります。(阿部)

▲…連休はどちらに行かれましたか、私は先日観察会の皆さんと行った「まほろばの道」を歩いてきました。嬉しいことがあったのでメールさせていただきます、笹塚古墳のすぐわきにキンランのさく所に行ってきた、昨年は10数株見つけたんですが今年はなんと20数株も見れました。凄く嬉しい反面盗掘にあわないかと心配になりました。キンラン2株のみでした、来年も会いたいな。(野澤5/4)

▲エビネの件ですが。わたしも思っていますが、登山道の1メートルの所に有ります、ので山野草好きのひとかグリーントラストのメンバーがもしかすると、観察会用に等と、つまらない憶測をしていますが、辞めましょうか。いやいやもう一つ有ります、グリーントラスト会員ではないウォーキングをしている人から聞いた事ですが、「アカマツ山」に有る大鷹の巣をカラスの攻撃から守る為に移動したと言う話を聞き、嫌な気分になりました。大鷹の為と思いの行為かとおもいますが、この様な自然に人為的な事をする事は大きなお世話、人間様のおごり高ぶりを感じ嫌な気分になりました。(野澤5/5)

◆こんには。キンランの件、返信遅くなりました。鹿沼ではキンランは稀です。本会会員で葛城に帰られた山口氏は、かつて鹿沼の茂呂山で、たくさんキンランを見たと言います。しかし、今はかなり難しい。あるとすれば、人が入らない里山ですよ。もっとも数年前、石崎氏に誘われて行った茂木のある里山では、結構多くの登山者がいるのに沢山のキンランを見ました。中には50cmもの大きなものがあって驚きました。サンコウチョウ、コイカルがさえずっていたのにも感激でしたね。連休中は7日も休まずひたすら仕事。仕事がなく、借金返済もまもなくを思うと、幸せというもの。個人事業主は好きで仕事をしているのだから、寝ないで働いても過労死はあり得ない。そうやって働いても低価格、低賃金の時代、まともな生活をするのは大変。そうした時代にもかかわらず、報酬もなく、膨大な時間をかけて、ボランティア活動が続けられる人を私は尊敬するものです。14日、丹勢山の件。この日、鹿沼はさつきマラソン、ということもあって参加者はさらに少ない見込みです。でも私はなんとこの山に行ったことがないので、1人でも意地でも行くつもりです。野澤さんもぜひお出かけください。直接日光に向かわれますか？清滝のバイパスに入って2つ目のコンビニ(セブンイレブン)で合流、ということで如何でしょうか？(阿部)

(次ページへ続く)

◆キンランの件ですが、昨日まほろばの古墳の場所を確認してきました。6畳の広さの場所に20数株確認できましたが山道の3米程の所にあり盗掘を気にして心配で成りません。商売の件ですが私は親の代よりの表具店ですので阿部さんのお店の様な自営業の厳しさを味わってきています、いまは年齢もあり仕事も一時期から見れば5割減ですが自営業ゆえ体の元気があれば、其れからお客様に仕事を頂ければ、それなりに頑張っていると思っております、考えようですが、定年のない自営業も悪くはないかもしれませんよ。それには健康ですわね、其れから14日の件ですが法事があり参加出来ません。男体山林道辺りは山ツツジの見頃かもしれませんね(野澤 5/12)

◆ご無沙汰いたしております。月報も案内書も送れぬまま月日は過ぎ、明日は予定通り、夕日岳ハイキングです。AM6:20 鹿沼市役所P、AM7:00 古峰神社大駐車場集合。今回は鹿沼学舎との共催。クリンソウのお花畑あり。下山後時間があれば古峰神社に参詣いたします。お出かけください。(阿部)

◆お誘い有り難う御座います、鹿沼の山には興味ありますが、明日は地区防災訓練があり都合により欠席します、天気は申し分なく植物もまだ楽しめますが残念です、有り難う御座いました。(野澤 6/3)

山書談話室

白坂正治氏よりいただいたおたより、今回は洒落たメッセージです。

即興拙詩——月報第48号に寄せる——

無言の言

目は口ほどにものを言う

みつめてごらん 目を

目の奥の心の瞳をみつめてごらん

魂のひだをノックしてごらん

ほら、そこかしこに涙のつぶがきらりと絆をうたってる。

言の葉の舟を魂の水面みなもに浮かべてごらん。

誌面の旅路、無言の行紡ぐ 愛の黙もたし

しずまず しずまない しじま 沈黙 いのちの鼓動

愛はしずまない。

2017年3月10日 早春の目覚めに

…自己を知ることはやがて他人を知ることである。私達は私達の魂がみづから達した高さに応じて、私達の周囲に次第に多くの個性を発見してゆく。自己に対して盲目な人の見る世界はただ一様の灰色である。自己の魂をまたたきせざる眼をもって凝視し得た人の前には、一切のものが光と色との美しい交錯において揚げられる。恰もすぐれた画家がアムステルダムのユダヤ街にもつねに絵画的な美と気高い威厳とを見出し、その住民がギリシア人でないことを憂いなかったように、自己の個性の理解に透徹し得た人は最も平凡な人間の間においてさえそれぞれの個性を発見することができるのである。かようにして私はここでも個性が与えられたものではなくて獲得されねばならぬものであることを知るのである。私はただ愛することによって他の個性を理解する。分ち選ぶ理智を捨てて抱きかえる情意によってそれを知る。場当りの印象や気紛れな直観をもってではなく、辛抱強い愛としなやかな洞察によってそれを把握するのである。しかしながら愛するということは如何に困難であるか。——なんじ心を尽し、精神を尽し、思を尽して主なる汝の神を愛すべし、これは大にして第一の誠なり、第二も亦之にひとし、己の如く汝の隣を愛すべし。

三木清『人生論ノート』より「個性について」抜粋



自然観察クラブ 会費納入のご案内

年会費を納入ください。

口座番号：ゆうちょ銀行店番 078 普通 0528847

- ☆ 年会費（個人または家族） 1,800 円
- 〃 （会報不要または直接取りに来られる方） 600 円

※ 会報はインターネットでもご覧になれます。

- ☆ 会費の主な用途
会報発行・発送用諸経費（郵送料、封筒・印刷用紙、インク代等）、
プリンター保守費用、臨時催事の通信、その他
- ☆ バックナンバーご希望の方、毎月2部以上送付希望の方は、阿部まで。

自然観察クラブ 2017年度 活動予定(今後)

- 7月23日(日) 北小サマースクール「雑木林の昆虫観察」
30日(日) (鹿沼市立図書館主催・鹿沼学舎協力)北小サマースクール
「ギーコン釣りと水の生き物観察会」
- 8月 1日(火) 北小サマースクール「北小周辺史跡巡り」
- 9月10日(日) (鹿沼学舎共催)横根山ハイキング
ハイランドロッジ～横根山～井戸湿原～五段ノ滝～井戸湿原
～象ノ鼻～ハイランドロッジ
- 24日(日) 那須・朝日岳と三本槍岳
峠の茶屋～峰の茶屋～朝日岳～清水平～三本槍岳
- 10月15日(日) 《日本百名山紀行》男体山登山
日光二荒山神社～男体山
- 11月 5日(日) (鹿沼学舎共催)加蘇、久我の里を歩こう
～神社・史跡を訪ねる歴史の旅～
- 19日(日) 《日本百名山紀行》筑波山～奇岩怪石を巡る～
筑波神社～御幸ガ原～男体山～女体山～弁慶七戻石～筑波神社
- 12月10日(日) 奥久慈、八溝山ハイキング
- 1月 下野、風土記のみち(鉄道利用の旅)
- 2月 安蘇、寺久保山ハイキング
- 3月 西大芦、お天気山ハイキング
～麓の鎮守めぐり(神舟神社・大芦神社・長安寺)
- 4月 (春休み特集)東京・小下沢より景信山・高尾山へ
(オウギカズラ、ナガバノスミレサイシン)

(企画立案:阿部良司)



好日往来

先日、石川さやか市議に誘われて「街なかマップ作り」の会合に出席し、久しぶりにJさんにお会いした。彼女は山形・新庄の出身である。そのとび抜けた明るさと暖か味のある持ち前の雰囲気は東北の人に特有のもの、僕には思える。姉さん気質できびしさはあるが、憎めない、愛すべき人である。向上心のある方で、改革意欲に燃えている。後日、僕の店に立ち寄られて、しばし、本会の今後について話し合った。彼女は本会が単なるハイキングではなく、植物などを勉強できること、また、鹿沼だけにとどまらず栃木県内を活動範囲としていることに意義があり、貴重な存在であるから、もっと一般の人が参加しやすい行事を計画して積極的に広報すべきだ、とのこと、おっしゃる通り。

その数日後、久しぶりにNさんが洗濯物を持って来店。息子さんが成長されて手がかからなくなったから、また会の行事に参加したい、とのこと。さっそく、8月14日に予定していた「至仏山」にお誘いしたが、この山の場合アプローチが長いうえに、戸倉——鳩待峠間の行きも帰りもバスに乗らねばならないことを考慮した結果、日光あたりしよう、というわけで、男体山に決定。彼女が生粋の山ガールであることは既知の事実であるが、いただいたメールに「男体山なら余裕で登頂できそうですね!」とは、本当に!?(このお盆山行は結局雨のため中止となった)

かつて本会の行事で、日光の西ノ湖から千手ヶ浜に出て湖畔を歩き、高山を越えて竜頭ノ滝までハイキングしたことがあった。この時たしか2~30人の参加者があったが、声をかけてその人たちを集めてきたのはNさんであった。その人脈の広さと積極的な生き方には頭の下がる思いである。「山友」西山義信氏はご病気でしばらく山はお休ませざるを得ぬ状況でもあり、小生は目標を失っていた所であるが、Nさんとの再会で、またやる気が出てきた感じ。

その数日後、久しぶりにMさんが来店。月報第49号が届かないのを、「去年、会費を払っていなかったかしら」とご心配とのこと。「49号はほとんど出来ているが、いざ発送、となると冒頭の催物案内の行事がすでに終わっていてやり直し、ということの繰り返しでなかなか発送できない状況」と話すと、「それなら案内書は別刷りにして、本体の方は本の紹介や研究、報告、観察記録だけで完結されたらいかが? 楽しみにしている人は多いのだから、なるべく月報は月刊で貰ってほしい」とのこと。本会の月報を楽しみにしている人がおられたとは、涙の出るほど、有難い言葉である。

このお三方の意見も含め、会の今後の運営に生かしていくべく、食事を共にしながらさらに意見集約をはかりたいと思い、自然観察クラブ活動報告および懇親会を8月26日(土)に計画しました。興味のある方、詳細は阿部までお問い合わせください。(阿部良司)

近況心境～あとがきに代えて～

忙しいことはすばらしいことだ。それは人を喜ばせ、人を幸福にすることにつながるのだから。そして自分の幸福にもつながるのだから。仕事が忙しければ、趣味や道楽に現を抜かしているひまはない。だから余計な出費はしなくてすむ(はず)。

何を頼んでも、何をお誘いしても、「忙しい」と言って断る人を僕はそっと見守るのみだ。自分もそうせざるを得なくなる時が来るから。そしてそういう時が来た。自らそういう道を選んだのだし、そうせざるを得なかったのだから、喜ぶべきことだ。それでも何とか本会のモットー「読み、書き、歩く」だけは何とか続けているつもり。しかし月報の編集人は商品管理をはじめ入出荷の単純作業量が格段に増え、月報の編集に充てる時間が無くなってしまった状況です。それでもなんとか、せめて季刊でも、会報はお送りしたいと思いますので、ご理解ご協力、よろしく願いいたします。

ボブ・ディラン特集は当初、ボブ・ディランと、スーズ・ロトロ、ジョン・バエズ、サラ・ラウンズという3人の女性との関係について研究することを目的と考えていました。「Blonde On Blonde」のあと、ボブ・ディランはバイク事故を起こし、姿を消します。このことを知っているボブ・ディラン・ファンは、ノーベル賞受賞決定のニュースが流れたとき、ディランが姿を消してしまったことを、不思議には思わなかった。むしろ「ボブ・ディランらしい」と思ったはずで。

バイク事故で姿を消し、再び現われた時、ボブ・ディランは声も姿も変わっていました。そして時代も変わった。それ以降の、僕は特に美しい詩と美しい曲(それはサラ・ラウンズ(ディラン)とともにあって生まれた作品なのであろう)をぜひ紹介したいと思いつつも、しかし、ボブ・ディランは今も健在でそしてさらに変わりつつあり、到底あと一度くらいの特集で終わられるものではなく、ボブ・ディラン特集は前号までの2回で終了させていただくことになりました。ボブ・ディランが記念講演(録音)の中で「ぜひ、詩を曲と一緒に楽しんでほしい」と言っていたように、ボブ・ディランの詩は曲とともにあるのです。音楽として聞いて初めてボブ・ディランの訴えは理解できるのだと思います。

やがて終わりは来る。思い切って終わりにすることも生き方もかもしれない。でも細々と続けてなんとか終りをやり過ごすことは美しいことだと思う。ボブ・ディランもそうあってほしい。友だちとも、いつまでもつながっていたいから、どうしたら終わりが来ないかを考えています。

(阿部良司)



鹿沼の自然・栃木の旅 月報第49号

2017年8月発行

北光・自然観察クラブ 鹿沼

鹿沼市戸張町1818

(クリーニングハウスあべ内)

発行人 阿部 良司

携帯 090-1884-3774

FAX 0289-62-3774

携帯 ☒ shizenclub.2006@docomo.ne.jp

E-mail a2b5r7j7@one.bc9.jp

ホームページでもご覧になれます→

クリーニングハウスあべ

